

---

# 零崎捕識の人間食事

識織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

零崎捕識の人間食事

### 【Nコード】

N0229V

### 【作者名】

識織

### 【あらすじ】

零崎一賊で最も異常な殺人鬼・零崎捕識。

始まりはとある裏路地での、零崎人識との出会い……。彼の異常とは！？彼の人生とは！？

\*キャラが崩壊しているかも！！

## プロローグ(前書き)

処女作ですがよろしくお願ひします!!

## プロローグ

とある裏路地

「それで、お前は何してんだ？」

「見て分からない？人を食べてる。それにしても目撃されるのは初めてだよ」

2人の少年がいるのは裏路地の奥の方。

そこには普通では無い光景がある。

それは床や壁一面に広がる血の海と、現在進行形で人を食べている少年だ。

「質問はそれだけならこつちからも質問。名前は？」

質問をされていた少年が、質問を返す。

「俺は零崎人識。お前は？」

「俺は佐原識さばらし。それで？俺が殺人鬼で家族にしたって？」

「ああ、そうだ。こういうのは兄貴の仕事なんだが…まあいい。お前はもう殺人鬼…いや殺人鬼だ。」

「そうだね。俺は食人鬼だ。いいよ。その家族になろうじゃないか」

少年――佐原識が笑みを浮かべながら言った。

「それじゃあ、お前は今日から零崎捕識せんざきとらしきでどうた？捕食者から取って」

少年――零崎人識は確認する。

「いいよ、それで。中々的を射ている。それじゃあ今日からよろしく、人識の兄貴」

「こつちこそよろしくな、捕識」

これは5年前に終わった物語。

佐原識が零崎捕識になった瞬間だった。

## ブログ（後書き）

投稿が遅くなるかもしれませんが。  
感想などをお願いします！！

**第零話「零崎の日常」(前書き)**

続きを書きました。

気軽に読んでください。

## 第零話「零崎の日常」

「捕識どこ？あつ舞織、捕識知らない？」

「知りませんねえ、軋識のお兄さんなら知ってるかもしれせん」  
舞織は話しかけてきた少女に答えた。

「ありがとー、舞織。聞いてみる」

そう言つて少女は行つてしまった。

「鉦織のお姉さんも大変そうですね」  
舞織は呟いた。

その頃、少女――鉦織は零崎軋識のところに行った。

「ねえ、軋識兄さん。捕識知らない？」

「捕識ならコンビニにアイス買いに行つたつちや」

「ただいま」

と言つてコンビニ袋片手に捕識が帰つて来た。

「おかえりだつちや」

「おかえり、捕識。何も言わずに出かけるから、捜したじゃない」



「ゴメンね、錠。錠はアイス、苺でよかったよね」

「…うん。さすが捕識。あたしの好きなものは分かってるね 双識  
兄さんじゃあこっちはいかないよ」

「そこで双識の兄貴と比べないでくれ」

それは本当に嫌そうだった。

「良いじゃない 比べはしたけど、捕識の方が良いもん」

「はいはい、さいですか」

「ちいですよ」

そう言って錠織は捕識の首に腕を回した。

捕識は慣れているのかそのまま引き摺りながら歩く。

（仲が良すぎるっちな）

軋識は声には出さずに思った。

「アイス買って来たよ」

捕識はそう言って、リビングの机の上に置いた。

「ありがとな 捕識」

一番最初に、アイスに手を出したのは零崎人識だった。

「人識の兄貴は何でもいいんだろ？」

「ああ、何でもいいぜ」

そんな会話をしていると、他の零崎も出て来た。

それが零崎の日常だった。

**第零話「零崎の日常」(後書き)**

感想をよろしくお願いします。

第一話「突然の訪問者」(前書き)

続き書きました！  
読んでください。

## 第一話「突然の訪問者」

ある日の朝のこと。

零崎が全員集まっている珍しいときにその人物は訪れた。

見た目赤色が目立つあの《人類最強》――哀川潤である。

最初に出迎えたのは、捕識を捜す鉦織。

「あつ、潤さんだ。どうしたの？私は捕識を捜してるから、これで

質問しながらも、その場を後にしようとしている鉦織であった。

「おい待てよ、鉦織ちゃん。あたしより捕識くんが先かよ」

哀川は不満顔で言った。

「当たり前だよ 私の中の優先順位はいつでも捕識が一番だから、それが潤さんでもね」

鉦織は笑顔で答えた。

「そうかよ、ここまで思われてる捕識くんが羨ましいね」

哀川は溜め息混じりに言った。

「いいでしょ それで潤さんはどうして来たの？」

「あたしも捕識くんに用事があつてね」

「そうなの？じゃあ、一緒に捜そうよ 私は捕識を見つけるの得意だから、すぐ見つかるよ」

その提案で一緒に見つけることになった二人であった。

哀川の捕識への用事とは何なのか？

疑問だ。

## 第一話「突然の訪問者」(後書き)

読んでくれてありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

第二話「哀川潤の用事」(前書き)

続き書きました!!

よろしくお願ひします!!



## 第二話「哀川潤の用事」

捕識を捜している二人ー鉦織と哀川は、まず零崎軋識のところへ言った。

「軋識兄さん、捕識知らない？」

「知らないっちゃ。…来てたのかつちゃ、人類最強」

哀川を見て、軋識は言った。

「おう、捕識くんは用事があってね」

「用事って何っちゃ？」

それには、弟を変なことに巻き込むな、といったニュアンスがあった。

「あたしだって、好きで巻き込んでるわけじゃないぜ？今回のことは、あいつにしか出来ないことだからね。こっやって来てるのさ」

そう言い終わると後ろから

「それで？俺に何の用事な訳？潤さん」

と質問された。

三人が振り向くと、そこには普通に捕識がいた。

「久しぶりだな、捕識くん。実はさ、あたしの依頼でどうしても必要なんだよ、捕識くんが」

「人類最強なんだから、俺なんか必要ないでしょう？」

「それがいるんだよ。」

「ふーん、まあ良いけど。座って話そう、立って話すのは疲れるから」

捕識の提案で、大人数が座れる部屋に来たー哀川、鉦織、軋識。

鉦織は捕識に抱きついて、引き摺られている状態だ。

部屋に入ると、大きな机があり、軋識、捕識、鉦織。その向かい側に哀川が座った。

「それで？その依頼って何な訳？潤さん」

最初に話を切り出したのは捕識だった。

「実は、真心の成長を見てやって欲しいって小唄に言われて、良いって言っちゃまってよ」

本当に後悔しているようだ。

「自分の代わりに、あの《人類最終》の相手をして欲しいってこと？」

少し刺のある言い方。

「頼む、この通り！お前だったら簡単にあしらえるだろ？」

哀川が手を合わせて頼む。

「仕方ないな。その代わり時間制限で。あんなのを制限無しに相手をするのは嫌だから」

「ああ、分かった。それでいいよ！捕識くん、ありがとな」

「いいの、捕識？それで」

「良いんだよ、鈍。こっちは時間内に逃げ回っても良いんだから」

「そっか 捕識は頭良いね」

「別に簡単なことだよ。潤さん、後もう一つだけ要望が」

「良いぜ、あたしの代わりに真心とやり合ってくれるなら。それで何だ？」

「武器を使っても良いか？」

その要望に最初に反応したのは、軋識だった。

「お前、武器を持つのか？普段、めったに武器を使わないお前が！」

「そつだよ、軋識の兄貴、口調を忘れてるよ」

「あつ、そうっちな。それにしても久しぶりに見えるっちな。二年ぶりっちな。あの武装をしたお前を見るっちは」

「あんなのは武装じゃないよ、軋識の兄貴。武装っていうなら、軋識の兄貴の方がそれっばいよ」

「武装した捕識が見れる やったね、これはみんなに知らせなきゃ」

哀川がまだ良いと言っていないのに、鉦織は上機嫌に部屋を後にした。

「まあ鉦織ちゃんが行っちゃったことだし良いぜ、使っても。あたしも見てみたいしな、捕識くんの武器をな」

そんなことで決まった、時間制限有りの零崎捕識による、想影真心の成長を見るための戦闘。

成長を見るためとはいえ勝者はどちらか!!

哀川が認める捕識の実力とは？

第二話「哀川潤の用事」(後書き)

感想などお願いします!!

第三話「零崎捕識VS想影真心 前」(前書き)

続き書きました!!

### 第三話「零崎捕識VS想影真心 前」

次の日。

零崎家の庭のところで行われることになった戦闘。

その日の朝は騒がしかった。

「捕識、お前が武装するんだってな？かははっ、また珍しいな」

「相手はあの《人類最終》だよ？備えておいて損は無いよ」

「そりゃあ、そうだ」

「まあ潤さんの言う通り簡単にあしらえるかは、無しにしてもね。今回は勝たせてもらおうかな」

その独り言は誰にも聞こえていない。

「何か言ったか？」

「何も言っただけだよ。それじゃあね、人識の兄貴。俺は手入れがあるから、さすがに二年間放置はダメだね」

そう言っただけで自室に戻って行く。

「あいつ、大丈夫か？顔色が悪かったが」

人識が言っていると

「人識兄さんもそう思う？ 私もそう思うんだけど…原因が原因だから」

と言って鉦織が来た。

「何だよ、その原因って？」

人識が聞き返す。

「捕識、食べてないもの。この一週間ぐらい…人を」

それを聞いて人識は納得した。

「それはヤバいな…もうそろそろ我慢の限界か」

「だと思っ。でも、捕識ってあまりそういうこと言わないから」

鉦織は心配そうに言った。

「だよな…ここは」

と人識が言っている途中で双識、軋識、舞織が入って来た。

その後ろには他の零崎がいた。

「ここは私達家族の出番だね」

双識が代表するように言った。



「そうなるね…でも、大丈夫かな？捕識」

「どうしてだい？鉦織ちゃん」

「だって一週間食べてないときとかに、いきなり行くと荒れるから。前もそうだったし…ねえ人識兄さん」

「だよな…荒れてるよな。まあそんなときは兄貴に盾になってもらうか」

「そうだね、それしか無いよね」

二人は納得した様子。

「ちょっと待って。どうして僕が盾になるのが決定、何だい？」

その双識からの質問は鉦織が答えた。

「だって双識兄さんは長兄じゃない。だから、捕識の盾にはぴったりじゃない」

「そうですね、双識のお兄さんにはぴったりの役ですね」

舞織も納得した。

どうやら他の零崎もそれで納得したようだ。

双識、鉦織、軋識、人識、舞織が捕識の部屋に向かった。

「それじゃあ」

とドアの前で双識が言うと、ドアが開いた。

「どうした？大人数で集まって」

捕識が出て来て言った。

「捕識の顔色が悪かったから、心配で来たの。一週間食べてなかったし」

鉦織が捕識に説明した。

「ああ、もう大丈夫だよ。手入れの前に食べてきたから、心配しなくても知らない奴だったし。さすがに《人類最終》相手に食べずには要られなかったから」

捕識はそう説明した。

「なら、良かった」

鉦織がそう言った時、玄関の方から哀川の声と石丸小唄の声がした。

「どつやら来たようだよ」

「本当にいいの？」

鉦織が聞くと頷いて、玄関の方に向かう捕識。

それに他の五人も着いていく。

役者も全員揃い、いよいよ戦闘が始まる。

第三話「零崎捕識VS想影真心 前」(後書き)

今後もよろしくお願いします!!

第四話「零崎捕識VS想影真心 開始」(前書き)

続き、書きました!!

#### 第四話「零崎捕識VS想影真心 開始」

双識、鉦織、軋識、人識、舞織、捕識の六人が声がする玄関に向かった。

そこには哀川、石丸、想影真心の三人がいた。

「よお、捕識くん。準備は出来てるか？」

哀川にそう聞かれて

「出来てるよ、潤さん。食べた後でまあまあ気分は良いしね」

その一瞬だけ、彼の目が人から捕食者に変わった。

食物連鎖の頂点のような捕食者の目に…。

「そうかよ、だったら良かった」

そう言っただけで真心を前に出させる。

「それじゃあこいつの相手をよろしくな」

「分かったよ。その変わり一時間だよ、それ以上はしないから」

「ああ、分かった。真心もそれでいいだろ？」

「いいぞ。でも、こいつ強いのか？」

捕識を指さして真心が言った。

「強いぜ、捕識くんは。このあたしが負けそうになって、本気を出されたら負けてたろうからな」

その言葉には全員が驚いた。

「買い被りすぎだよ。大体あの時は本気だったし」

「嘘だろ、お前はどこかでストッパーをかけてる。本気なんて一度も出したことなんて無いだろう？」

「一回ぐらいはある。でもそれは過去だよ、過去は振り返っても仕方がない」

「やっぱりあたしの時は本気じゃなかっただろ？」

「出す必要性がなかったんだよ、潤さんのことは色々聞いてたからね。敵に回すのも嫌だし、食べても後が怖い」

「まあ良いけどよ。真心、安心しな。こいつは強いぜ、このあたしが保証してやる」

「なら、いい。俺様は良いぞ、いーちゃんとも知り合いらしいし」

「いーちゃん？ああ、あの戯言遣いか。俺の前は無言に近いよ」

「何でだ？」

「戯言を言うなら黙ってと言ったら喋る回数が減ったんだよ。あの

戯言遣いのことは後にして、やるなら早くしようよ。腹が減るから、食べに行きたいし」

「だったら始めるぞ」

哀川がそう言って、場所を移動する。

零崎の庭には、捕識たち以外の零崎もいた。

捕識と真心が庭に立ち、哀川達が縁側に座って観戦する。

「それじゃ始めるぜ？お二人さん。制限時間は一時間、スタート！」

哀川の合図で始まった。

捕識の方はまるで獣のように両手、両足を地につけて、姿勢を低くして真心を見ている。

最初に攻撃を仕掛けたのは真心だった。

両手を組んで、一つの拳のようにして跳び、捕識目掛けて降り下ろす。

捕識はギリギリまで動かず、自分に当たる瞬間に真心より上に跳躍して避ける。

地面に降りた時、音はしず、跳ぶ前と同じ姿勢で真心を見る。

それは獲物を狙う獣に似ていた。



真心の攻撃は誰もいない場所に炸裂した。

地面に大きめの穴があく。

「相変わらず捕識くんは身軽だな、鉦織ちゃん」

哀川は隣にいる鉦織に話しかけた。

話しかけられた鉦織の手には、布をかけられた細長いものが握られていた。

「それって、捕識くんの武器か？」

哀川が聞くと頷いた。

その布を取ろうとすると、手を叩かれた。

「痛っ、何するんだよ。鉦織ちゃん」

「捕識の許可なく触っちゃダメだよ。それにこれは今回、使わないかもしれないし」

そう言いながらも、鉦織の視線の先は捕識だ。

哀川と鉦織がしゃべっている間にも五分が経過した。

お互いの立場は変わらない。

真心が攻撃を仕掛け、捕識が避ける。

見方によっては真心が優勢に見える。

しかし、真心の攻撃は一度も捕識に当たっていない。  
すべてが避けられている。

戦闘は始まったばかり。

どちらが勝つかはまだ分からない。

そして、捕識の武器は使用されるかも…。

残り五十五分間。

第四話「零崎捕識VS想影真心 開始」(後書き)

二人の戦闘は後二話くらい続く予定です。  
今後よろしくお願ひします!!

第五話「零崎捕識VS想影真心 二」(前書き)

続き書きました!!

第五話「零崎捕識VS想影真心 二」

「つまらねえな、攻撃しろよ、一時間なんてすぐだぜ？」

哀川が言う。

「わざとだろ？真面目にやってねえし。なあ鈍織」

鈍織の隣にいる人識が、同意を求めるように鈍織に言った。

無反応…ずっと捕識を見ている。

「ダメだな、おい、鈍織」

そう言いながらも、布に触る。

やはり哀川の二の舞で、手を叩かれる。

「ダメだよ、捕識の」

言っている途中で、捕識が鈍織を呼んだ。

見ると鈍織の目の前にいた。

「貸して、攻撃に移ろうじゃないか。まあ鈍がないとバランスが悪いか」

「うん、バランスは悪いだろっけど捕識だから出来るよ」

答えて、布を取る。

その隙を真心が攻撃してくる。

それも軽々と跳躍して避ける。

少しの間、空中で止まって

「鈍、投げて」

と呼び掛ける。

それに答えるように、布を取られたモノを投げた。

モノをタイミング良く受け取ると、その態勢、空中で撃った。

甲高い銃声が鳴り響く。

その銃弾は真心の肩をかすった。

「なるほどね、アレが捕識くんの二つ名の由来か。確かにアレは捕識くんの二つ名プレストリーハンター《捕食獵師》にはぴったりだ」

哀川は強調するように言った。

そのぴったりりの武器とは猟銃だった。

しかも持ち手の部分が鉄で覆われている。

撃ったと思ったら、銃身の方を持って真心のいる方へ、その持ち手

を降り下ろす。

真心はとっさに避けて当たることはなかった。

しかし、当たっていたら重症になっていたかもしれない。

真心がいた場所には、拳で穴があいた時よりは小さいとはいえ小規模の穴があいた。

当たらなかったのが分かると、すぐに猟銃を背中に背負って姿勢を獣のものに変える。

「やっぱりバランスが悪い。だからまあ獵師より捕食に戻ろう」

そのまま真心に近づく。

真心も捕識が真面目になったのに気付いたのか構える。

「何でその構えなんだ？まるで人より獣みたいだ」

真心が聞くと、捕識は笑みを浮かべた。

それはまさに獰猛な獣の笑みだった。

「褒め言葉として受け取っておくよ」

「褒めてないぞ」

「俺達みたいな存在にとっては、お前は人だと言われるより獣みたいだと言われる方が嬉しいんだよ」

そう答えて真心に飛び掛かる。

それは獲物に飛び掛かる獣を連想させた。

真心が避ける。

だが完璧ではなかったようで、腕から血が流れた。

「なあ鉦織ちゃん、さっきのバランスが悪いつてどどういう意味だ？」

「そのままの意味だよ、潤さん。捕識の猟師は一人じゃ成り立たない、元々が捕食者だから。相手の注意を惹き付ける罠がいるの」

「それが鉦織ちゃんか。でも良いのか？それって結構危険だぜ？」

「良いの。捕識が助けてくれるから」

「なるほどね、それが鉦織ちゃんと捕識くんの関係か。足りない部分を補い会おう。鉦織ちゃんが罠をして、相手の隙を突くのが捕識くん。あいつほど隙を突くのが得意な奴もいないだろ。それも捕食者の性ってか」

「そついうことだよ、潤さん」

「それじゃあ、あたしから提案だ。猟師の完成形を見せてくれ。良いだろう？小唄、残り三十分間。どうせ真心はあいつを気に入っちゃまっただろつし」

「ええいいですわ、ディアフレンドお友達」



今までしゃべらなかつた石丸が同意した。

「おい、真心に捕識くん。聞こえてたか？」

哀川が聞く。

すると動きを止めて

「聞こえてたぞ」

「聞こえてたよ」

と返答した。

「それじゃあ良いよな？」

「俺様はいいぞ、楽しそうで」

「俺は鉈が良ければいいけど？」

決定権は鉈織に。

鉈織は捕識を見て、名前の通りの鉈を持つ。

鎖で繋がれた鉈が二本。

左右に持つと捕識の隣に立った。

「そうこなくっちゃな。じゃあ残り三十分間スタート！」

哀川の提案で始まった零崎捕識・鉦織VS想影真心。

果たして結果は!?

残り三十分間

第五話「零崎捕識VS想影真心 二」(後書き)

次で戦闘は終わりの予定です。

今後もよろしくお願いします!!

捕識の二つ名の《捕食獵師》のプレストリーは捕食性、ハンターは  
獵師

という意味の英語から取りました。

第六話「零崎捕識VS想影真心 終了」

急ぎよ行われることになった零崎捕識・鉦織VS想影真心の戦闘。

「鉦、いつも通りな」

「分かってるよ」

鉦織はそう答えて、真心に突進していく。

その手に鉦を二本構えて…。

捕識は哀川のところの後退して、鉦織が用意したらしい銃弾を猟銃に装備する。

それを見ていた哀川が

「良いのか？そんなにのんびりしていて」

声を掛ける。

「いいんだよ、今は鉦の猟場だからね。俺は俺のタイミングで合わせるよ」

そう言いながらも二人に注目している。

鉦織の方は鉦二本で攻撃している。

攻撃は当たっているようで、真心の体から血が流れる。

「お前も強いな、さっきの捕識くんも強かったけど」

「捕識が強いのは当たり前だよ」

話ながらも、鈍織の攻撃は止まらない。

真心を相手にしても止まらない攻撃は、真心に防戦をさせる。

そんな真心の隙に後ろから捕識が近づいた。

真心が気付いた時には、もうすぐ後ろにいて猟銃の持ち手を降り下ろす。

今度は間に合わずに、真心の頭に当たった。

頭から流れた血が顔を伝う。

「油断した、でもお前も手加減したな？」

真心が聞くと、捕識は頷いた。

「二対一だからね。俺なりのハンデだよ」

そう言いながらも銃口を真心に向ける。

撃たれると思いき移動する。

そのせいもあって、捕識に集中しており鈍織に関しては疎かになった。

その隙を突かれて、後ろから鈍が降り下ろされる。

鈍は真心の左腕に命中して血が流れると同時に、骨が軋む音がした。

それを見ていた哀川が

「なかなか良い動きしてんな、アレはされたらあたしでも危ないぜ」

真心が撃たれると思った猟銃はフェイクのようで撃たれなかった。

「これからだぜ？あの二人が怖いのは」

哀川の発言に対して、人識が補足した。

「それは見ものだな」

哀川は楽しそうに言う。

そう言っている間にも状況は進んでおり、真心に向かっていく捕識の手には

「マジかよ、アレは怖いな」

鈍が握られていた、真心も捕識は猟銃だと思っていて、腕から手にかけて血が飛ぶ。

そして後ろからの銃声がして、銃弾が真心の右肩を貫いた。

「なるほどな、思い込みを使った攻撃か。まるで奇術だ、固定観念

に縛られれば終わりか…普通だったらもう死んでるな」

哀川は解説するように言った。

それだけではない、鉦織の武器が猟銃から鉦になり、こんども逆かと考えると同じ鉦、その度に真心の傷は増えていった。

相手の考えの裏をかくような攻撃は続き、三十分間はすぐに経過した。

第六話「零崎捕識VS想影真心 終了」(後書き)

投稿、遅くなってしまいましたが、今後もよろしく願います！



第七話「零崎捕識VS想影真心 後」

「終わりだ、まだ続けたいなら別だが」

哀川が言つと、捕識と鉦織が戻つて来た。怪我をした真心を連れて。

「最初から一時間のはずだ、だからしないよ」

捕識はそう言いながら、疲れた鉦織を背負っていて座れない…その代わり真心を座らせて、舞織が手当てをする。

「鉦、俺座りたいんだけど」

「座ればいいじゃない」

「鉦を背負っていて座れないんだけど」

「じゃあ立つてて」

「鉦が降りるって選択肢は無いんだ？」

「無いよ、ありえないよ」

「さいですか」

「さいですよ」

今のやり取りで捕識は座るのを諦めた。鉦織はそのまま眠ってしまった。捕識は、鉦織を起こさないように

立つたままだ。

「お前らって仲が良いよな、いーたんと玖渚ちゃんみたいに…まああいつらはいいつらで変わってるけどな」

哀川に言われて、捕識は鉦織を見た。

「仲が良いとはよく言われるよ、でもそれだけだよ。俺はこれ以上近付けない、結局、捕食者だからね」

自嘲気味に言っても、時々その瞳に捕食者の光がまとわりつく。

「でも良いと思うぞ、今のままで。鉦織ちゃんもよさそうだし」

「だけど時々分からなくなるよ、自分がナニかを。まあそんなことより想影真心、怪我は大丈夫か？手加減したからひどくは無いだろうけど」

「ああすぐ治る、それよりお前強いな。哀川潤が言う通りだ」

「俺は強く無いよ、人を喰らうことしか出来ないただの捕食者だ。人から逸脱してしまった…それに比べてお前は人のままそれだけの力がある、強いのはお前だよ」

少し黙って、捕識は真心に質問した。その瞳は静かなものだった、まるで全てを見透かすように…。

「お前にとっての人の定義は何だ？」

「…定義とか言われても俺様は分からないけど、俺様が俺様のこと

を人間だと思えば人間じゃないのか？」

「そう、なら想影真心、お前は人間かな？」

「人間だ、お前もな」

その一言を聞いて捕識の頭に昔のことがフラッシュバックする。

（私は人間です。例え人を喰らうことしか出来なくても…それが大きな過ちでも。だから兄さんあなたも人間です、妹の私が人間なのだからあなたも人間なんです。そうじゃなきゃ私は一人ぼっちになつてしまいます）

（そうだね、俺は人間だ。君が人間で有る限りは…）

（はい、それで私は幸せです）

そこでフラッシュバックは終わった。それは過去の断片、終わった物語の一幕。

「おーい、捕識くん大丈夫か？」

哀川の呼び掛けで捕識の意識は過去から現在に戻った。

「ああ悪いね、昔同じことを言われたのを思い出してね」

「相手は誰だ？」

「妹だよ、お前と同じくらいの…死んだ妹」

「何で死んだんだい？」

双識が話しかけた。

捕識が過去を話すことは滅多にない、この機会に聞いておこうと考えたのだ。

「殺されたよ…妹も俺と一緒に人を喰らうことしか出来なかったから。ちょうどその後だよ、潤さんに会ったのは」

「ああそうなるのか、あの時は」

そう言っていると鉦織が起きた。

「その子って写真で捕識と写ってた子？」

話が聞こえていたのか聞いてきた。

「そうあの子。まあこの話はここで終わりです…潤さん達はこれからどうするわけ？」

今の一瞬でいつもの捕識に変わった。どうやらこれ以上話す気は無いらしい。

「あたしらは」

と哀川が言う前に真心が

「俺様泊まりたいぞ、何か楽しそうだ」

と提案した。

零崎達も別にいいのか泊まることが決定した。

第七話「零崎捕識VS想影真心 後」(後書き)

捕識の過去の話が少し出しました。

その全貌はもう少し後の話で書ければと思います。

今後もよろしくお願いします!!

## 第八話「お泊まり会 前」

泊まることになったその日の夜のこと…。

晩ご飯を双識が作るとか言ったので、一賊全員で止めた後…。

結局、多数決で捕識が作るようになった。料理が上手いのだ。作るうと思えば何でも作れるらしい…。

「意外だな、あたし的には捕識くんより鉦織ちゃんって感じなんだけどよ」

哀川が料理を待ちながら呟いた。

今の状況は、哀川、石丸、真心を含めて零崎達が集まっていた。

知らない零崎もいたので自己紹介が終わった後だ。

捕識が作り、鉦織が味見をしている。

「捕識の方が美味いんだよ」

何故かその間、人識が哀川の相手をするようになった。

「何で味見の係がいるんだ？あんなのは自分でやればいいじゃん」

「味が分からないんだよ、潤さん。普段は人を食べてるから、人の料理の味が分からないんだよ」

出来た料理を運んできた捕識本人がその疑問に答えた。

運ばれた料理は、どこのレストランだ？って感じに綺麗に見た目よく仕上がっていた。

皿には和洋中の料理が一品ずつのっている、さすがの哀川でも黙った。

後ろから鉦織がご飯を運んできた。

皿を捕識がご飯を鉦織が全て配り終わり食べ始める。

捕識の前には何も置いてない。

「お前も食べるよ」

「食べないよ、まずいから」

「結構美味いぜ」

「それはどうも、でも俺にはとってはまずいよ…仕方ないからちよつと出掛けてくる」

「どこ行くの？」

鉦織が食べながら聞いた。

「ちよつと食べに…大丈夫だよ、知らない奴だから」

捕識は返事をしながら出て行った。



「それじゃあ捕識くんが帰ってくるまで盛り上がるか」

哀川の言葉に賛同した。

途中までは全員で盛り上がっていた。

夜が深まっていくことに真心、舞織、零崎の数人が寝始め、鉦織がうとうととしている。

「鉦織ちゃん、寝たかったら寝ていいんだぜ？」

哀川が声をかけるが首を横に振った。

「鉦織は捕識がいないと寝れないっちゃ」

軋識が代わりに教えると、これには哀川も驚いた。

「依存症だな」

その咳きに起きている全員が頷いた。

それから一時間後に捕識は帰って来た。

「やっと帰って来たね、ほら捕識くん鉦織ちゃんを寝かしてあげてよ」

双識の声が聞こえたのか部屋に入ってきて中を見る。

「寝ればいいのに」

捕識はそう言って、鉦織の隣に行く。

鉦織は隣に来た捕識を見て、

「おかえり」

うとうとしながらも言った。

「ただいま」

捕識も返事をして座る。

座ると同時に鉦織は捕識の肩に頭を置いて寝た。

「おお、寝たな」

哀川が寝た鉦織を見て言った。

「寝るよ、俺は枕じゃないっていうのにね、まあ慣れてるからいいけど…あいつもそうだったから」

またその目は何も無い場所を見ている。

「妹ちゃんか？」

「そうだよ、でもまだ話す気は無いよ、いくら潤さんの頼みでもね。まだその時じゃない」

また静かに言った。過去の話が出ると雰囲気が変わる。静かなのに

凜猛な獣を思わせるものに。過去の彼がそうだったかのように…

「その時が来たら教えるよ」

「いいけど何で気になるわけ？双識の兄貴とかもだけど」

「珍しいからだよ。人を食べなければ生きていけない、人を食べることを日常とする君が…その妹ちゃんも含めるなら君達かな。しかも君の言い方だと 何かありそうだしね」

双識が代弁するように答えた。それを聞いて周りを見ると全員が頷いた。

「そう言われると気になるものだね、俺の過去は」

捕識は苦笑した。

## 第九話「お泊まり会 後」

「お前にとって過去は何だ？」

「忘れたいけど忘れてはいけないものだよ」

普通に答えた。

「まあそうだよな、忘れちゃったら妹ちゃんのことも忘れちゃうんだから。嫌だよなあんな可愛い子のことを忘れるのは」

それを聞いて捕識自身が驚いた。

「会ったことあつたっけ？」

「見たことはあるよ、お前といる時とか少し話したこともある…まああたしとお前はあの時が初対面だけだよ」

「そう言われれば潤さんらしき人のことを言ってたような気がする。結局は過去だけだ」

それは自嘲的な笑みを浮かべて言った。それから置いてあつたクッションを鈍織の頭の下に敷いて、自分は窓際に移動した。

「暑いよ、こじ」

そう呟いて窓を開けて、普通に服の中から袋を出す。その袋の中は赤い液体で彩られていて、中身は見えない。だが、一賊全員には中身が分かるのか冷や汗が流れる。

捕識は気にしていないのか袋に手を入れて中身を取り出した。それは人の肘から手にかけての部分。それを骨ごと食べ始める。血はもう出ない。

「捕識、グロいぜ」

人識が呟く間も、骨を砕く音などの咀嚼音は絶えない。

「後は食べてきたけど、これの二本だけは持って帰って来たよ、錠織がどうせ起きてると思ったからね。まあ少しの間は我慢してよ、食べなきゃ生きていけないから」

そう説明する間にも一本完食。二本目を食べ始める。

「あたしも初めて見るぜ、人を食べてるのは…かなりグロいな」

哀川のコメントに一賊全員がタメ息を吐く。

二本目を完食したのか、袋を上の部分を一纏めで持って机に来る。

そのまま一つだけ未使用のグラスを持ってくると袋の中の血を注ぐ。

ギリギリまで注いだ血をそのまま飲み干した。

「これでしばらくもつはず」

袋をゴミ箱に放り込んで言った。

「やっぱり我慢しようとか心がけるのか？」

## 哀川の質問に

「そりゃあするさ、一緒にいるのは殺人鬼とはいえ人間なんだから捕識は答えた。線引きをするように…。」

「俺の認識は今も昔も変わらず、人間は獲物で食い物でしかないよ」  
「それこそが自分の根底にあるものだ、と言いたいようだ。」

それから各自で寝始めた。

第九話「お泊まり会 後」（後書き）

最近投稿が遅れていてすいません。

3日に一話ぐらいのペースで続けたいと思います。

早く出来ればそれより早く投稿します。

今後よろしく願います。

## 第十話「主人公不在!？」

次の日の朝、みんなが起きる中捕識だけが寝ている。

「今日は起きないかもしれないよ、捕識って長いと二日間くらい寝てるから」

鉦織の言葉に周りは起きない捕識を見る。まるで冬眠中の獣のように寝ている。

「これは起きないな、今日一日は確実に」

「だったらさ、捕識くんが一緒だと行けない場所に行かないか？」

哀川の提案に全員の頭に疑問符が浮かんでいる。

「捕識くんと妹ちゃんの思い出の場所にな」

それで捕識を置いていった場所は湖で、空がよく見渡せた。

「ここが思い出の場所なのか」

人識の質問に哀川は頷いた。

「教えてもらったからな、妹ちゃんに。嬉しそうに教えてくれたよ」

その時、周りの景色が歪んだ。驚いている間にも空が夜空に変わっていた。



「何が起きたの!？」

鈍織が驚きの声をあげるが周りも同じようだ。

「ここはこうなりやすいんだよ、妹ちゃんが見ている夢みたいなもので過去に起きたことの繰り返しだと思ってくれ。ここには妹ちゃんの墓があるらしいからな」

言い終わった頃には零崎達の目の前に二人の少年少女がいた。

「兄さん、星が綺麗ですね」

「そうだな、君はどうやってここを見つけたんだ？」

「内緒です、私だけの秘密ですよ、兄さん」

「ならいいよ、聞かないから」

「ありがとうございます、識兄さん」

「識ってアレは捕識か」

人識が言つと、みんなが二人に集中した。

「なあ、靈華。俺の妹」

「何ですか、識。私の兄さん」

「誕生日プレゼント何がいい？」

「あつ！何で先に聞いちゃうんですか？私が聞くつもりでここに来たのに…じゃあ兄さんをください」

「…もう一度言って」

「だ、だから兄さんをください！」

「…いいよ、君にだったら俺をあげるよ。だから交換しよう」

「いいですよ、交換しましょう。兄さんに私をあげます」

「これって兄妹のする会話じゃなくなってますね」

舞織のコメントにみんなが黙る。

「それじゃあ写真つきのネックレスで」

「はい、そうしましょう。私が兄さんをもらって」

「俺が君をもらう」

「ビビったよ、いきなり俺をくれとか」

識のコメントにみんなが頷く。

「でも兄さんは分かってくれました、さすがです」

「それほどでもないよ、君は俺の妹で俺は君の兄だからね」

「そうですね、兄さん。もう少し夜空を眺めたら帰りましょう。私

の目的は果たしましたから」

「そうしようか」

そのまま霊華は識の肩に頭をのせた。

そこでまた景色が歪み、元に戻る。

「見えるのはここまでだ、何であの妹ちゃんが死んだかは捕識くんしか分からないけどな」

哀川は言いながら歩く。

「どこに行くの？潤さん」

鈍織の質問に哀川は

「墓参りだよ」

答えながら歩く。

しばらく行くと簡易な墓があった。

「これだな、妹ちゃんのは」

哀川が言った後、みんなで墓参りをして帰った。

帰ると捕識が起きていた。

「おかえり、どこに行ってたんだ？」

捕識の質問に哀川が

「内緒だ、それじゃああたし達は帰らしてもらおうぜ」

答えながらも帰ると言った。

「また来てね、潤さん」

鉦織が別れの挨拶をして哀川達は帰って行く。

玄関で真心と小唄が出たところで哀川は捕識に止められた。

「潤さん、霊華の墓に行っただろう？」

「何で分かった？」

「匂いだよ、潤さん達からあの場所の匂いがしたから。まあ怒らないよ、俺はまだ行けそうにないから。また来てよ、潤さん」

捕識はそう言って戻っていった。

哀川は玄関から出た。

閑話休題「ある日の会話」(前書き)

続き、書きました。

## 閑話休題「ある日の会話」

「捕識、お前ってどれくらい食べずにいられるっっちゃ？」

「それってどれくらい我慢できるかってこと？」

「そうだったちゃ」

「頑張つて一週間ちよいかな。それ以上は俺にも分からないよ」

「そうなんだ、結構我慢できるんだ。私はもつと短いと思つてたよ」

「頑張らないと無理だけどね、この感覚は軋識の兄貴や鉦織ちゃんが食事を一切しずにとれくらいいられるかって聞かれるのと同じだよ」

「ああ、そういう意味にもなるっちな」

「だったら私は無理だなあ、一週間ちよいも我慢するのは」

「気持ちとしては俺も鉦織ちゃんと一緒だよ。でも俺はしなくちゃいけない、それが人間と関わる、家族になるってことだと思つから」

「そうなのかもね、でも捕識も人間だと思つよ」

「どうして？」

「だって捕識が獣なら、こんな風に話せないしすぐに襲ってくるもの」

「だったら俺は人間の言葉が分かって話せる、そんな人間の皮を被った獣かもしれないよ」

「そうだとしても捕識は私達の家族だよ、ねえ軋識兄さん？」

「そうだったちゃ、それでも捕識は俺達の家族だったちゃ」

「そこまで言うなら俺もあんた達を、家族を信じてみるよ。初めてだよ、ここまで言われたのは…今までも関わった人間が何人かいたけどここまで言ったのはあんた達が初めてだよ」

「信じていいよ、ねえそれでお願いがあるの。私のことちゃん付けしないで！双識兄さんのことを思い出すから！」

「分かったよ、じゃあ何って呼ばれたい？」

「鉈がいい、鉈織だとみんなにも呼ばれてるから捕識には鉈って呼ばれたい…ダメかな？」

「いいよ、それで呼ぶよ」

「やったー！ちゃんと呼んでね、呼ばないと返事しないかも」

「分かったよ、ちゃんと呼ぶよ」

「行ってしまったつちやな」

「行っちゃたね、そんなに重要なことかな？」

「…鈍感っちな」

「何か言った？」

「なにも言っていないっちな」

これは捕識が零崎一賊の一員なっただばかりの頃の会話である。



閑話休題「ある日の会話」(後書き)

投稿遅くなりました、すいません。

早く投稿できるように頑張ります。

## 第十一話「京都旅行 一」

今、捕識と鉦織は京都に来ている。どうしてそうなったかということ、さかのぼって哀川達が帰った日の夜。

「あのね捕識、一緒に旅行へ行かない？京都に」

その質問は突然だった、周りも驚いたが捕識も驚いた。

「京都に？鉦つて京都に知り合いいたっけ…あっ、あの女の子が」

「そう、なんか会いたいから来てほしいって。それに捕識にも会ってみたって。あの子の兄さんと友達なんだね」

「直の高貴な妹ちゃんか、確かに気になるかもしれない。話は何回か聞いたからね。いいよ、行こうか」

ということがあって、二人は京都にある城咲のマンションに向かっていた。

辿り着いたそこは三十二階建ての超がついていいほどの高層高級マンションだった。

二人を呼んだ人物はこの最上階の一室にいるということ。

その最上階の一室に入って最初に目についたのは、床を埋め尽くすコードだった。

鉦織がその奥にある部屋に向かつて

「友、来たよ」

声をかけると返事がかえってきた。それを確認して二人はコードを踏まないようにして進んだ。

部屋にいた人物は青い髪が特徴的な少女だった。

「やつほー、来てくれて嬉しいよ、なつちゃん」

「久しぶりだね、友。捕識、友だよ」

「初めまして、君の兄貴の友達の零崎捕識だ、よろしく」

「直くんが言ってた印象と少し違うけど、よろしくね。僕様ちゃん  
は玖渚友、好きに呼んでいいよ。僕様ちゃんはほおくんって呼ぶね」

「じゃあ錠と同じ風に呼ぶよ。直は何って言ってた？俺のこと」

「まるで獣が人の皮を被るのに失敗して、人と獣が同居しているよ  
うな面白い子って言ってたよ」

「中々の射た発言をするね、あいつ」

「嬉しそうだね、ほおくんは。ねえなつちゃん」

「そうだね。あのね、捕識はいつくんとも知り合いなんだよ」

「ほおくんはいーちゃんの友達なの？」

「いーちゃんって戯言遣いのこと？」

「そつだよ」

「友達ってほど仲良くはないよ、しゃべらないし」

「そつなの？どうして？」

「戯言を言うなら黙っててなんて言ったらしゃべらなくなっちゃった」

「さすがのいっくんも何も言えないね」

「だねー。ほおくんって結構毒舌っぽいね」

「そつかな？どう思う？鈍」

いきなり話を振られた鈍織は返事につまった。

「えっ、私に聞くの？捕識はね、相手によっては毒舌だよ。特に双識兄さんには」

つまりながらも答えると、捕識が反論した。

「あれは双識の兄貴が鬱陶しいから悪いんだよ」

「そうなんだ、そのお兄さんってどんな人なの？」

「「ただの変態の兄貴（兄さん）」」

二人はハモリながら即答した。

「面白いね、二人とも。いーちゃんが友達になつた京都連続通り魔事件の犯人も、なっちゃんやほおくんの家族なんだよね」

「そうだよ」

三人はそんな会話をしながら盛り上がった。

「また来てねー、なっちゃんもほおくんも」

「また来るよ」

「また来るね」

友と捕識と鉦織はそんな別れの挨拶をして別れた。

「この後どうする？鉦」

「うーん、じゃあ京都観光しようよ。みんなのお土産も買いたいし」

「そうしようか」

そんな感じで二人での京都旅行はまだまだ続く。

第十二話「京都旅行 二」(前書き)

やっと完成しました。

## 第十二話「京都旅行 二」

玖渚と会った日はホテルに泊まって、次の日の朝から京都観光中の二人は炎天下の中を歩いていた。

「あのさー、捕識」

「何？ 鉦」

「どうして私達は人識兄さんの事件現場を回っているんでしょう」

「何でかな？ 気になるからかな、人識の兄貴が事件を起こした場所が」

「でもこれじゃあ観光にならないよ」

「って言いながら次の現場に着いたよ。まあ未遂だけどね」

この二人は何故か零崎人識が起こした京都連続通り魔事件の現場を回っていた。そんな会話をしている間にも次の現場に辿り着いた。

「ここがいつくんと初対面した場所なんだよね」

「らしいよ。あの二人って似ているよね。違うのに似ているって感じかな」

「だよね、でもここが最後じゃない？ 私達に分かるのは」

「そうだね、俺達が知ってるのはここまでだ」

「じゃあ、これからどうしよう?」

「そうだね」

そこから悩んでしまった二人。最初の予定である京都観光はどこへ行ってしまったのか…。

「それじゃあこんどは本当に京都観光をしようか。まだ土産を買ってないし」

捕識の提案で、最初の予定であった本当の京都観光を始めた。

「あつ、次はあつちに行こう!」

「次はこつち!」

と興味津々で、土産物屋に行けば

「あつ、このキーホルダー可愛い!」

「この八つ橋も美味しそう!」

といった感じにテンションが高い鉦織だった。

京都からの帰りに鉦織がある1つの提案をした。

「ねえ捕識、お揃いでストラップ買おうよ」

「いいけど?」



そして一軒の店に入って選び始めた。

「じゃあ私がこれで捕識がこれね」

それはクロスチャームにパズルのパーツをあしらったプレートがセツトになったものだった。

支払いを終えて、鉦織が自分と捕識の携帯に早速、ストラップを取り付ける。鉦織は上機嫌に携帯をしまった。

そんな二人が零崎家に帰ったのはその日の夜だった。勿論、土産などの代金は捕識が払ったのだが。

「おかえり、二人とも」

「おかえりつちや」

最初に二人を出迎えたのは双識と軋識の二人だった。

「ただいま」

「ただいま」

と二人も返して中に入る。

家族が待つ家に帰って来たことで二人の旅行は終わった。

第十二話「京都旅行 二」(後書き)

投稿が遅くなりました!!

なるべく早く投稿できるように頑張りますのでよろしくお願いします。

### 第十三話「京都旅行 後」

京都から家に帰って来た捕識と鉦織。お土産を渡して、寛いでいた。

捕識は携帯でメールをしているようで、鉦織も同じようだ。

そんな二人を見て、舞織が1つのことに気づき、隣にいる人識に

「ねえ、人識くん。あの二人お揃いのストラップしてますよ」

その指摘は人識以外にも聞こえたのか二人の携帯を見ている。そこには旅行帰りに鉦織が捕識と買ったストラップが二人の動きに合わせて揺れていた。

「同じだね」

「同じだな」

ほとんどが思ったことは一つ。

(旅行でまた仲が深まったか…)

そんな中で二人に声をかけたのが双識だった。

「鉦織ちゃんと捕識くん、そのストラップどうしたの？」

捕識は呼ばれたことに気づいていないのかメールに没頭していた。鉦織は携帯から目をはなして双識を見た。

「捕識が買ってくれたの お揃いの」

そう言っつて捕識のストラップと自分のストラップを並べるようにして捕識の前に向かい合っつて座つた。そこで捕識も気づいたのか周りを見たがすぐにメールを再開した。

「誰にメールしてるの？」

「内緒だよ、教えない」

「えー、教えてよ」

「ダメだよ、俺にだつて黙秘権は有るんだからさ」

「そこまで言うならいいけど」

今回は鉦織が諦めた。

「捕識のメール相手なんて一人しかいないっつちゃ」

軋識は相手を知っているのかニヤニヤ笑いを浮かべている。

「軋識の兄貴、絶対に言うなよ？」

捕識は軋識を少し睨み付けるように見て言つた。

「分かつてるっつちゃ」

そんな捕識にも気楽に軋識は答える。

「ちなみに人識や鉦織は会つたことがあるはずだっつちゃ」

「俺達が会ったことがある奴か…それって呪い名の奴か？」

人識は悩んだ末に聞いた。

「これ以上は答えられないっちゃ。捕識が怖いっちゃ」

見ると捕識が軋識を睨み付けていた、それはまるで威嚇する獣のようだった。

周りは思っ。

(そんなに知られたくないのか) と。

捕識はこれ以上何かを言われるのが嫌なのか出ていった。鉦織がそれに慌てると足に何かが当たった。見ると足下にはペンダントのついたネックレスが落ちていた。ネックレスを拾った。

「そのペンダント、開くみたいですよ」

横から見ていた舞織が鉦織にペンダントを指さして教える。そのネックレスを持って机に向かった鉦織を零崎で囲む。

「開けるよ？」

鉦織の呟きに全員が頷いた。ペンダントを開くとそこには少女の写真がはめられていた。その少女は写真の中で笑みを浮かべていた。相手を大切に思っていることが分かるそんな笑みだった。

「この子って」

鉦織の思っていることは分かる。その少女はここにいる全員が見たことがある、哀川達と墓参りに行った捕識の妹だった。

「可愛い子ですね」

舞織の感想に

「そうだね、生きてたら捕識と一緒に僕らの家族になってたかもしれないね」

双識が賛同した。それは全員の中の頭の中にも浮かんだ考えだった。

そこに捕識が急いだ様子で入ってきた。

「あつ、捕識これ」

鉦織がそのネックレスをそっと渡すと、捕識は貰うとペンダントを開いて安堵したように座った。

「よかった」

呟きながらネックレスを自分の首にする。

「その子って捕識の妹だよな？」

「ああ、そういえば潤さんと一緒に墓参りに行ったんだよね。そうだよ、俺の妹の霊華。写真はこれしかないんだ、あいつは滅多に写真を撮るうとはしなかったから」

その目はどこか遠くを見ているように遠く感じた。

「そうなんだ、じゃあこんど記念にこの皆で撮ろうよ　撮ってお墓に飾って捕識が元気にしてるって教えてあげようよ」

その提案に全員が賛成した。

「撮ろう、捕識。あの子も喜ぶよ」

「いいよ…でも少し待ってね、俺があいつの墓に行けるようになるまで」

捕識が霊華の墓参りに行けるようになるまで写真撮影はお預けだが撮ることが決定した。

## 第十四話「狼」

京都旅行後、捕識はよく夜中にでかけるようになった。その日から何故か多くの血痕が残されているのに死体が発見されないという不可解な事件が毎晩発生していた。

「これって多分捕識くんだよな」

「そうだったかな、違うのなら違って欲しいっちゃが」

その事件は一般人よりも殺し名や呪い名への被害が断トツで多く、事件は表側では知られていないが裏では大事件とされている。

「何でも『狼』の再来かとか噂されてるらしいっちゃ」

「『狼』か、アスはその狼が捕識くんだった時はどうする気だい？」

「どうするって・・・これって結局は毎晩殺し名にしても呪い名にしても消えてるったことだったっちゃ。実際、捕識が犯人だったらこんなことはやめさせるっちゃ。こんなのはただの喰い荒らしだったっちゃ」

「そうだね、その時は俺達家族の出番だ。アス、俺は思うんだ、この事件の原因は俺達にあるんじゃないかって」

「どついうことだったっちゃ？」

「俺達は捕識くんに過去のことを色々聞いた、これまで聞いたこともなかったことだった、だからこそ捕識くんの中でも戻ってるんじゃないかと思ってるね」



「戻ってる・・・過去の捕識に戻ってるってことだっちゃんか？」

「そうだよ、彼の妹が死んだとき詳しくは知らないけれどそれと同時に一つのことが無くなっただ」

「何だっちゃん？それは」

「人食いの噂だよ。あつたんだよ、その噂は前からでもそれはある時パタンと途絶えたんだ・・・それは一族として存在していて全員が人を喰らうっていうもので、その噂にも『狼』って言葉が使われていた」

「！？それってもしかして」

「それが彼の過去に関わっているかもしれない。でもこれはあくまで憶測に過ぎないから結局は捕識くん本人に聞くしかないけどね」

「そうだっちゃん」

早朝に双識と軋識が相談をしている時、事態は動いていた。少しずつではあるが・・・。

その日の午後に哀川が怒ったように屋敷を訪れた。

「捕識くんいるか？」

最初に出迎えたのは鉦織で驚いたが案内した。

捕識を見て最初に哀川は捕識を殴った。捕識は驚いたようだが理由

が分かったのか、口の中が切れたらしく血を吐いて笑みを浮かべた。それは真心と戦闘した時にも浮かべた獰猛な獣の笑みだった。

「てめえ自分がしたこの意味が分かってんのか！」

「ただ喰っただけじゃないか、そのどこが悪いんだよ？喰った相手が殺し名だから、呪い名だから怒ってるのか？俺達からしたらそんなのは関係無いよ、人間だって虫の中での分類なんて気にしないのと同じだよ。獣が人の中での分類なんて気にしない」

「いつまでてめえは獣でいる気だ、てめえの体は人間だろうがだつたらてめえは人間なんだよ。妹ちゃんはお前も人間だって言ったんだろ？だつたらお前は人間だろうが」

「それはあいつが人間だったからだよ、俺が人間であるのはあいつがいたからだよ。でももうあいつはいないんだよ、だつたら俺が人間である理由は無いんだよ」

「分からねえな、何でお前が一番妹ちゃんを汚してんだ？何でお前が一番妹ちゃんを否定してんだよ？」

その言葉に思うことがあつたらしく、下を向いて強く手を握りしめてその手からは血が流れた。流れていく中、顔をあげると哀川を睨み付けた。それはまるで憎き仇を見るように。

「あいつを殺したのは人間じゃないか、どこまで人間でありたかったあいつを殺したのはその人間じゃないか・・・そんな人間になるくらいなら俺は獣でいい。あいつを殺した人間になるくらいなら獣のまま俺はいいんだよ」

それは悲痛な叫びにも聞こえた。まるで今まで苦しくても隠してきたことを吐きだすように。

「もう分からないんだよ、俺がどっちなのか・・・俺にとってあいつは道標だったんだよ、俺が人間であるための。それなのにあいつはもういないんだ、分からないよ、俺が獣なのか人間なのかなんて」  
そこで一度黙ると、小さな声で言った。

「気付いたら喰い終わってた、匂いがするんだよ人殺しの匂い。」

殺人鬼じゃない奴

らの匂い、それを嗅ぐとああ喰わなきゃいけないって思うんだよ。こんなことは今までなかったのに、この衝動が始まったのは哀川さん達があいつの墓参りに行った後からだよ。あいつの大好きな場所の匂い、あの匂いがしてからおかしいんだ。今までだったら別に殺し名や呪い名にあっても喰わなきゃいけないなんて思わなかったのに」

それはどこか無意識に近いのかもしれない。だが彼が殺し名や呪い名を喰らったのは事実だ。それを聞いて哀川は怒るのをやめて逆に溜息を吐いた。

「分かった、お前が言いたいことは分かった。あたしがしばらくここにいてやるよ・・・珍しく仕事が入ってないからな。まああたしもお前がそんな状態じゃあ仕事に集中できないな」

哀川はそう言いながら捕識の頭を撫でた。それに捕識が驚いたようだが、次にはその目に涙を浮かべていた。今までこんな風に自分の胸の内を語ったことはなかったのだろう・・・彼は泣いた、嗚咽を漏らしながら泣いた。

「本当はこうやって泣きたかったんだろう？妹ちゃんが死んだ時でもお前は泣かなかったよな、泣いていいんだぜ？お前にとって妹ちゃんがそれだけ大切だったってそれが証明なるんだからさ」

捕識はもう我慢することなく泣き続けた。それは妹の死に対する涙でもあつただろうし、今までの苦しさを表わす涙でもあつただろう。

## 第十五話「狼の正体」

捕識が泣くのをやめてから仕切り直すように零崎も含めて机に集まった。捕識を中央に据えるようにして。

「狼っていうのは確かに俺のことだよ」

前と今に噂で流れている『狼』とは捕識のことを表わしているようだ。

「でも俺だけじゃない、それは俺達に対する総称だよ。俺達自身が達を捕食者と呼ぶように他の奴らが俺達を狼と呼ぶんだ」

「結局お前らって何なんだ？妹ちゃんも詳しくは教えてくれなかったし、教えてくれたのは普通でも知れるところまでだった」

「俺がそう言ったからね、もし俺達のことを聞かれたらそう答えるんだよって。それにしても俺達のことを狼と呼ぶことを聞いた時はどんな皮肉だと思ったよ」

「どうしてだ？」

「狼は絶滅した動物だ、それじゃあ狼と呼ばれる俺達は絶滅するの  
が、滅びるのが決定しているようじゃないか。まあその通りで本当に滅びてしまったけどね」

そう聞くと確かにそれは皮肉以外の何物でも無いだろう。

「それで？お前らの正体は何だよ？」

「簡単だよ、俺達は呪のろわれたんだ」

「どういうことだ？」

「昔の話だよ。一族の中でどうしてそうしたのかは不明だが、一人の男が人間を喰らった。それからその男は狂ったように人を喰らい始めた。それはいつしか一族の中にまで伝染していき今の世まで続いている。たちの悪い伝染病、呪い・・・俺達はそんな風に伝えられている。それが事実なのかを確かめる術すべはもう無いけれど俺達の始まりはその時からだよ、でもそれが呪いだというなら誰から呪われたんだろうね、その男か、その男が喰らった人間か、それとも神か。まあ最後のは冗談だけだよ」

呪い、そんな一言で片づけられていいものなのか？

「何だか嘘みたいな話だな。でもそれが確かにお前らの始まりなんだろうな、お前らを見てるとそれでも信じられる気がする」

「この呪いに抗った男がいた、しかし最後には狂って自殺した。最後までその男は人を喰らうことを拒否したそうだよ。でも俺から言わせればそいつはどこまでいっても人間だったんだろう、だから男は自殺して正解だったんだよ、最後まで人間で終わらせたいなら俺達は早々に自殺するべきだ」

その言葉は少し自嘲的な響きがあった。そんなことも自分には出来ないと言っているようだった。

「確かに俺達のこの捕食行動は大きな過ちだろうさ、許されざる過ちだ。自殺した男を一族の奴らは愚か者だと蔑んだ、俺はあの男が

とても尊い人だと思うよ。だってそうじゃないか、俺達は愚か者と  
言いながらその男と同じように死ねと言われたら絶対に無理なんだ  
から。潤さんが言った通り俺達の体は人間だ、だからか時々思うよ。  
・もしかして俺達がしているのはとても滑稽なことじゃないのか？  
別にこんな風に生きなくても生きられるんじゃないのか？って、  
でも俺にはやっぱり無理だよ。だってその度にあの男の死に様が頭  
に浮かぶんだから」

「もしかしてその男の死体を発見したのって」

「俺だよ、そして死んだのは俺の父親だ。だから俺は俺の父親を尊  
敬してる、だってあの人は一族の中でとても尊いことをしたんだ。  
死ぬことで呪いを殺したんだから、最後まで抗ったんだから。妹は  
そのことを知らずに死んだけどね、言おうと思うと怖くなるんだ。  
一族の奴らが言っている愚か者は俺達の父親なんだよって、言っ  
てしまえば簡単だろうに俺にはそれが出来なかったよ」

「ああ、だから妹ちゃんはお前に執着してたのか。本当の意味で頼  
れるのが自分の兄貴しかいないって分かってたんだろうぜ」

「あいつもあいつでどこか狂ってたんだろうな、あの環境の中で人  
間であるうとしたから。あいつは何をするにも俺の許可を欲しがっ  
たんだ」

「許可って何だよ？」

「許可は許可だよ。食事をするのも遊ぶのも話すのも寝るのも何を  
するにも俺を見て許可を取る。俺がいいよって言うまで、食事もし  
ない遊びもしない話もしない寝もしない。それがあいつにとっての  
ルールだったのかは分からないけれどいつも俺を見てた」

「その話なら聞いたぜ。『私は兄さんが許可してくれないと何も出  
来ないんです、私にとって兄さんは絶対なんですよ？こんなのはお  
かしいんでしょうか、それでもそうしていることで私は兄さんと繋  
がっているようで安心するんです。だから私は兄さんが死ぬ時は一  
緒に死のうつつで決めてるんです、兄さんがいない世界なんて意味は  
ありませんから』って。そう考えると妹ちゃんは完璧重度のブラコ  
ンだよな」

「でも俺にとつてもそれが普通だった、漠然とこいつが死ぬ時はき  
つと一緒になんだろうなって思ってた。まあこうして生きてるけど・  
・あいつは死ぬ時まで俺に許可を求めた。その時考えた、もしここ  
で俺が死ぬなと言ったら死ぬことを許可をしなかったら霊華は死な  
ないんだろうかって。でも俺は死ぬことを許可したんだ、許可しな  
かったらきつと霊華は苦しむだろうと思っただし、今も苦しいだろう  
あいつをそれ以上苦しませたくなかった、死ぬなら楽に死なせてあ  
げたかった。俺の我儘であいつが苦しむのは我慢出来なかった。俺  
にとつてあいつが苦しむのは絶対にしてはいけないことだったから  
それだけは我慢ならないからさ」

妹にとつて兄が大切な存在であったように、兄にとつても妹は大切  
な存在だったんだろう。二人は最後までお互いを大切にしていたん  
だろう。

「あのさ話は変わるけどよ、お前らつて人間喰う代わりに他のもの  
を食べたらダメなのか？」

「他のものって？」

「例えばあたしらが食べる肉とかさ」



「食べたたらあぁ食べたなって思うけど満腹感は無いかな。空腹感は続くからあまり意味は無いよ」

「でもそれを喰ってることである程度その捕食衝動は抑えられるんだらう?」

「まあほんの少しだけだね」

「ならあたしがお前のために買ってきてやるよ、ある程度噛みごたえのある肉をさ」

「それって何ですか?」

「ビーフジャーキー。お前は獣なんだらう? だったら銜くわえていようが時間かけて喰おうが違和感は無いと思うぞ」

「ハハハッ、確かにそうだね、それじゃあよろしくお願いします」

少しの間、ポカンとしていたが笑ってそう返事をした。そして哀川は言った通りそのまま買い出しに行った。

「本当にあの人は面白いよ」

捕識は笑みを浮かべながらそんな哀川を見て呟いた。その笑みは今までと違い獣のものでは無く、純粹に楽しそうに浮かべる人間の笑みだった。それを見て零崎達家族も、捕識の過去に思うことはあったらうが同じように笑みを浮かべた。

## 第十六話「捕食行動 上」

哀川は本気でビーフジャーキーを買ってきた。しかも段ボール一箱・  
。。。

「金の無駄使いだ」

買ってきてもらいながらも捕獲はそう言わずにはいられなかった。

「お前のために買ってやったんだ、文句は無しだぜ？」

「分かってるよ。ありがとうございます、潤さん」

「おう、素直でよろしい」

「何それ？潤さんぽくないよ」

「そうか？」

「そうだよ、潤さんは・・・いや今はいい」

「何だよ？途中でやめるなよ」

「内緒だよ、その時がきたら教えてあげる」

「お前こそらしくないぞ、その言い方は」

「とにかくそういうことにしてよ、それよりお客さんだよ。出夢だ  
」

そう言っていると玄関が開いた。

「ぜろっち遊ぼうぜ」

「人識の兄貴呼ばれてるよ」

「あいつの遊びは遊びじゃねえよ」

文句を言いながらも出て行った。

「あの二人も仲良いよね、それじゃあ俺も出かけて来る」

捕識は立ち上がった。

「安心してよ、食べに行くんじゃないから。ただ待ち合わせしてるから」

捕識も出て行った。

「鉦織ちゃんは行かなくていいのか？」

哀川の疑問に鉦織は頷いた。

「会つのはたぶんメール相手だろうから」

「そっか、それじゃああたしも待つぜ」

人識が帰って来たのはそれからちょうど一時間だった。捕識が帰って来たのはちょうどそれから二時間後だった。

「早かったな」

「ただの駄弁りだから早いよ、話すことがなくなったら帰るから」

それならメールで良いのでは？と思うが周りはそれに触れないように言わなかった。

「相手って誰だよ？あたしにまで内緒か？」

しばらく黙考していたがタメ息を吐いて答えた。

「直だよ、この度めでたく玖渚機関機関長に就任した玖渚直」

それには知っていたとはいえ全員が黙った。

「お前そいつとどうやって知り合ったんだ？いーたんみたいな感じか？あたしも詳しくは知らないけどさ」

「戯言遣いとは違うよ、それに直とは零崎になる前からの知り合いだよ。あいつの言い方を真似るなら高貴な私の高貴な友達といったところだよ」

「玖渚ちゃんの兄貴か」

「そう玖渚友の兄貴だよ、あいつの高貴な妹」

面白そうに答えた。その日の夜、捕識の補食を目の当たりにすると  
は誰も予想していなかった。

## 第十七話「捕食行動 下」

それから夜になって捕識は縁側に座っていた。

「何してんだ？捕識」

哀川が後ろから声をかけると振り向いた。

「別に何もしてないよ、ただ空腹感を我慢してるだけだよ」

哀川が隣に座ると捕識は哀川が買ってきたビーフジャーキーを食べていた。

「やっぱり無理なのか？人を食べるのを我慢するのは」

「俺はもう無理だよ、人を食べるのが当たり前でそれのどこがおかしいのかが分からない…潤さん誰か来るよ、人殺しの匂いがする」

「分かった、お前は手を出すなよ」

「分かってるよ。でも、もしもの時は食べるから…俺は奥にいるよ、この状態を我慢するのが精一杯だからね」

捕識はそのまま哀川を残して奥に行ってしまった。

哀川が様子を見に行くto確かに誰かがいた。その人物は哀川も見ることがなかった。

「誰だ？」

哀川は疑問を口にした。

「俺は石凧扇利<sup>せんり</sup>。人類最強に出会えて光荣だ」

「石凧か・・・何か用か？」

石凧は鎌を片手に持って答えた。

「俺は狼を排除しにきただけだ」

「何でそいつがここにいるって分かった？」

「それは言えない」

「そうか、生憎狼は出せないがあたしが相手をしてやるよ」

石凧と哀川の勝負が始まった。

その戦闘音が聞こえていたのか零崎も出て来る。

しかし、それは戦闘というには勝ち負けが決まっていた。

哀川の攻撃に石凧は鎌を使った防御しか出来ないでいるのだ。

それが続いていて決着が付きそうな時に奥から誰かが出て来た。

零崎達が振り向くとそこには捕識がいた。でもその捕識は今までと違っていた。その目はどこまでも捕食者の目だった。

「捕識？」

鈍織が全員が茫然とする中名前を呟く。

哀川もそれに気付いたのか

「捕識くん、やっぱり我慢出来なかったか」

それまでの攻防をやめて後ろに下がる。

「どうした？」

石凧は訝しげに疑問を口にした。

「ただお前が排除しにきたっていう狼が来たただけだ。気を付けるよ、気付く前に喰われるぞ」

哀川は相手に忠告する。石凧は訳が分からなかった。ただ次の瞬間に鎌を持った右手に激痛を感じるまでは。

「……っ!?!」

見ると自分の右腕が肩から無くなっていて、血が大量に出ている。その時、咀嚼音が自分の後ろからした。振り向くとそこに人の姿をした獣がおり、先ほどまで自分の一部であった右腕を喰らっていた。「だから気を付けろっていったろ」

哀川の言葉も石凧には届かない、彼はパニック状態にあった。獣捕識はそんな相手も気にせず右腕を喰らい尽した。その手に持

ついていた鎌を横に捨てて獲物を見る、次はどこを喰らうかを決めるように。

石皿は武器も無く、そんな状態では抵抗も出来なかった。右腕を喰らった後は左腕を喰らい、首に噛みついた。石皿は痙攣し続けて、こと切れたように動かなくなった。そこからはただの捕食だった。首から口を離して他の部分を喰らっていった。頭部から両足、内臓にいたるまで血以外は何も残さずに全てを喰らった。

「……またやっちゃった」

喰らい尽した後の血の海で捕識は呟いた。それは今までの捕識だった。いつもと違うのはその顔や服や手足が血に塗れているという部分だった。

そして哀川達の方を見る。その驚きの表情を見て彼は笑みを浮かべた、それはどこか悲しげな笑みだった。

「あーあ見られなくなかったんだけどな、こんな俺は」

言いながら手を振って血を落とすとそれで顔の血を拭った。でもそれは完全には拭い落せない。彼の全身が血塗れだからだ。

「それでもこれが俺だよ」

そう言って彼は零崎達とすれ違う。鉦織が何かを言おうとするがそれを双識が止めた。

「今はよそう、それより私達で彼のこれからを考えよう」

その言葉に鉦織は黙って頷いた。捕識は出て来た時と同じように奥へ戻って行った。



後には血の海と血の匂いと殺人鬼と人類最強が残された。

## 第十八話「これから」

捕識が捕食をした次の日。哀川を含めた零崎達は集まっていた。理由は捕識についてだ。

「あいつはヤバいぞ、今は俺達が認識出来ているから良いが出来なくなったら俺達でも容赦なく喰われる」

零崎の一人がそう呟いた。それは他の零崎も感じたことだ。

「でも彼は私達の家族だ、何とかしてあげたい」

それも全員が思ったことだ。そこで全員の視線が哀川に向く。

「あたしが請け負ってやってもいいけどよ、ここはお前ら家族で解決した方がいいんじゃないかねえか？」

哀川のその提案に全員が頷いた。

「だったら話は早い、あたしが連れて来てやるよ」

哀川は捕識がいる奥に行ってしまった。

「頷いたがこれからどうするっちゃん？アレはもう取り返しがつかないっちゃん」

軋識が双識を見て言う。

「そうだね、アスの言う通りだ。でも私達は家族だ、家族が出来る

ことをするしかないよ」

哀川は捕識を連れて来た。哀川の手などに傷があり、どうやら抵抗されたらしい。

「痛え、本気で引つ掻くなよ」

「……うるさい。俺に何の用？」

その雰囲気は零崎一賊の一員になった頃と似ていた。どこか殺人鬼とも違う雰囲気。今ではそれがどういうものなのかよく分かった。それは捕食者の雰囲気だったのだ。

「君が私達にして欲しいことって何かないかな？家族としては放っておけないよ」

「はっ？」

捕識は言っている意味が分からないのか驚いた。

「何でまだ家族とか言えるわけ？あんなの見て何で平気なわけ？」

どうやら戸惑っているようだ。

「普通無理だろ？化物って言うところだろ？何考えてるんだよ？分からないよ」

捕食者は殺人鬼を見て怯えている。まるで今まで見たことがないモノを見るように……。

「理解できねえか？」

哀川が尋ねる。

「理解出来ない。哀川潤、お前は理解出来るのか？」

捕識は聞き返した。

「簡単じゃねえか。こいつらは家族のことが心配で仕方がない家族愛溢れる奴らだつてな」

「そんなことは分かる。俺が分からないのはどうして俺がソコに適応されるのかだ」

「もつと簡単なことじゃねえか。お前もこいつらにとっては家族だつてことだ」

捕識は理解不能だというように零崎達を凝視した。沈黙がしばらく続いたが、いきなり捕識が笑いは始めた。

「ハハハハハッ、お前達おかしいよ。何で捕食者なんて受け入れられるんだ？今までいなかっただよ、そんな奴」

彼はおかしくてたまらないらしい笑い続けた。

「まあ嫌いじゃないけどそういう奴らも」

そう言って何かを考えるように悩み始めた。

「あつ、俺がして欲しいことがある。前も話したけど見た方が理解

しやすいと思うから…捕食者の屋敷に行かない？」

「行ったら」

「行ったら全て話すよ、妹がどうして死んだのかも全て」

どこか決心した感じだった。

そして哀川、零崎達は捕食者の生まれ育った屋敷へ行くこととなった。

## 第十九話「これからのために」

哀川と零崎達は捕識が生まれ育った屋敷を訪れていた。

「ここが捕識の家か」

「零崎捕識の家じゃない、佐原識の家だよ」

その一言はどこか区別するように言った。

屋敷は見た感じ古くからある武家屋敷のように大きく、歴史があるようだ。屋敷の前には木で造られた門があり、捕識が開ける。

その見た目に反して、一步踏み入れて目に入るのは夥おびただしい血痕だった。

それはこの屋敷で起きた争いの悲惨さを表わしているようだ。

殺人鬼や人類最強すら立ち止まるその光景を捕識は普通に進んで行く。

いや、普通ではないだろう。その血は彼の同族、家族であった者たちから流れたのだから……。

それでも捕識は進んで行く。まるでそのことを意識しないようにしているかのように、立ち止まることなく振り返ることなくまっすぐに。それに他の者たちも付いて行く。

門から少し歩いたところに引き戸の玄関があり、そこから屋敷内に

入る。

そこからも長い廊下になっていて、少し奥に大き目の和室があった。その和室に全員が入る。

「それじゃあここが集合場所で、後は好きに見て回ってくれていいよ」

今まで一言もしゃべらなかつた捕識が全員に言った。

「話してくれるんじゃないのか？」

哀川の質問に捕識は頷いて答えた。

「見てもらつてからでも遅くはないし、そっちの方が話しやすい。それとこの屋敷にあるモノで気になるモノがあったらここに持ってきて、集合した時に答えるよ・・・ここからは注意かな、たぶんまだ死体は放置されたままのがあるかもしれないけど触らないこと。これを守ってくれば後は自由だよ」

「集合はどれくらいだ？」

「今から四、五時間後くらいで」

「じゃあ五時間後にしよう」

「いいよ、それじゃあ五時間後にここ『食事の間』で待ってるよ」

そこからはそれぞれ別行動を取った。哀川は鉦織、人織、舞織と。双織は軋織、曲織と。他もそれぞれ。

捕識は食事の間に一人残って目を閉じる。まるで自分の住みかを確かめるように。

「・・・ごめんなさい、俺だけが生き残ってしまつて」

小さな声で謝罪する。その声は部屋の中に響き消えた。

哀川達四人は食事の間を出て廊下を歩いていた。その廊下にも血痕は絶えることが無い。

「それにしてもこの血の量はすげえな」

哀川の一言に鉦織が答えた。

「それだけここで人が殺されたつてことだよ」

「それも一方的にな」

哀川は鉦織の返答に付け加えながら一つの部屋に入った。

その部屋は少女の部屋らしく女物の着物が何着もかけられていた。

そこには四人にも見覚えがある着物があつた。

「ここはどうやら妹ちゃんの部屋みたいだな」

哀川が言いながら、机の上に置かれていた一冊の本を手を取った。背表紙に少量の血痕が付いていた。それは中身が白い本で、字が書かれていることから日記帳のようだ。その最後に書かれたページを



哀川が読み始める。

「?月?日。今日きつと私は死んでしまうのです。私がとても憧れをいだけ人間によって・・・でも私はそれでも人間になりたくて仕方がありません。何故なら私はあの人が自分の見た目と自分の所業の間で苦しんでいる姿を見たくないからです。勿論あの人はそんなことを表に出すことは一時も存在しません、勿論私の思いこみ過ぎなのかもしれません。でも私にはそう思えて仕方がないので。あの人は私にとつてたった一人の兄で、私が最も信頼しています、私が死ぬのであればそんな兄と一緒に死にたい・・・それが出来ないのであれば私はせめて兄の腕の中で死にたい。それが兄をこれから責めることになっても、これが私の最後の我儘で最後の願いなのです」

「この願いはきつと叶ったんですよ」

鉦織は下に俯きながら言った。それはどこか絞りだすような声だった。

「きつとな」

哀川はその頭を撫でた。人識は舞織は何も言わない、言えない。

ただそこから分かるのはたった一人の少女がたった一人の少年をとっても大切に思っていた気持ちの大きさだった。哀川達はその日記帳を持って部屋を後にした。

双識達も廊下を歩きながらその血の量の多さに圧倒されていた。

「これだけの血が流れて死んでいったんだね」

「それであいつだけが残ったっちゃか」

「それはどれだけ彼を苦しめたんだろうね、アスもトキモ気付いてるだろう？彼は苦しんでいる今も」

「それはあの時分かったっちゃ」

曲識も軋識の言葉に頷く。あの時 捕識が石風扇利を喰らった時の彼は、いつもの彼に戻った時苦しげだった。

会話をしている時に、双識達も一つの部屋に入った。

そこは書庫のようで色々な蔵書が置かれていた。彼らはそれを手に取りながら中身を見ていった。

「ちよつとこれを見てくれるかい」

双識はその一つの書物を持って二人を呼んだ。二人が双識のところに集まった。その書物の表紙には 人食いの と書かれていた。(最後の方は汚れていて字が読めない) そのある一ページを双識は呼んだ。

「人食いは恐ろしい。姿は人だがその中身はまさに獣。人を殺しては喰い散らかしていく。そんな人食いを殺した男がいた。その男は一本の刀で人食いの心臓を貫いて殺した。それまで人食いは殺せないモノと思っていた人々はそれから人食い狩りをするようになった。そんな中で生まれた一つの噂に奴らは『狼』が人の姿をとったモノだというのがあった。それを聞きつけた人々はついに奴らの肉を喰ら

い始めた。獣の肉を食うのはおかしいことではない、と言って。それからは人々と人食いの喰らい合いが続き、人食いは人々の前から消えた。その消えた先は人々も知らず知ろうともしなかった。だが時々噂で『狼』がまた人を喰らったらしいと流れることがあった、奴らは滅びずに息を殺しているのだらう。時々その呼び名に相応しく人を喰らいながら。」

「これって人が人喰いを喰ってたってことだよな」

「多分そういうことだっちゃ、この人食いが捕識達を示すならつちや」

「この『狼』ってというのが気になるね、彼らも『狼』って呼ばれてたみたいだから。これは本人に聞いた方がいいようだ」

この残酷な内容は本当なのか。真相を彼は知っているのだろうか。双識達はその書物を持って部屋を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0229v/>

---

零崎捕識の人間食事

2011年11月16日23時26分発行